



Title	大都市近郊農村におけるデカセギの影響
Author(s)	小内, 透; 小野寺, 理佳
Description	第3部 ブラジルにおけるデカセギの影響. 第11章
Relation	日系ブラジル人のトランスナショナルな移動と定住. 小内透編著. (外国人集住地域の社会学的総合研究 ; その8)
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 28, 259-280
Issue Date	2009-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38205
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_p259-280.pdf



第11章 大都市近郊農村におけるデカセギの影響

第1節 課題とねらい

近年、ニューカマー研究の一環として、日本に居住するブラジル人を対象にした研究が確実に増加している。これに対し、デカセギ者を送出する側の実情を実証的に把握しようとした調査研究は数少ない。

本章では、この点をふまえ、サンパウロ州近郊のスザノ市郊外にある日系人集住地・福博村を事例とし、デカセギ経験者（帰国者）とデカセギ留守家族を対象にした聞き取り調査を通じて、デカセギの実態、デカセギ者と留守家族とのつながりとそこにある問題を検討する¹⁾。

その際、二つの点に注意を払った。一つは、日本へのデカセギ者を送り出す地域の実情をできるだけ詳しく把握することである。日本に居住するブラジル人がブラジルのどういう地域でどういう生活をしていたのか、という点について検討した研究は少ないからである。二つめに、家族という視点を重視した。デカセギにともなって形成されるトランスナショナルな生活世界は、母国の留守家族とのつながりが中心になるからである。

以下、調査対象となった日系人集住地スザノ市福博村の歴史と現状を把握した上で、デカセギ経験者と留守家族を対象に、デカセギに行くまで、行ってから、帰国後といった時間の流れにそって、デカセギの実態、デカセギ者と留守家族とのつながりとデカセギが抱える問題について、検討していく。

第2節 福博村の歴史と現状

第1項 福博村の組織と歴史

福博村はサンパウロ市の東方34キロに位置するサンパウロ州スザノ市の中心部から南へ13キロの地点にあるイペランジャ地区（Vila Ipelândia）に位置している。福博村は、「村」という呼び名がついているものの、行政地区の名前ではない²⁾。イペランジャ地区に居住する日系人が作り上げた地縁的な相互扶助組織である。正確には「福博村会」（Associacao Nikkei do Bairro das Palmeiras）という（以下、福博村会の会員が居住する範囲を福博村とする）。

福博村の範域に住む日系人でも福博村会の会員でない者もいる。2006年8月調査時点で、この地域の日系人のうち約100戸が会員、約20戸が非会員である³⁾。あくまで任意参加による自主的な団体だからである。また、同地域には日系人以上の数のブラジル人も住んでいる。その多くは、日系人農家の家付き雇用者（カマラーダ）と不法占拠により地区内に住みついたファベーラの住人（後述）である。

イペランジャ地区に初めて入植した日本人は福岡県出身の原田敬太と古賀貞敏・茂敏兄弟の二家族である。入植は、1931年3月11日のことである。原田が入植した2年後には12、3家族が入植した。原田は彼らに続いて入植した日本人とともに、1935年1月、会員14名の福博日本人会を創設した。第二次世界大戦中、ブラジル政府の外国人の活動禁止命令により日本人会が解散させられたが、大戦が終わると、1948年に戦前の福博日本人会の名を改め福博村会が創設、日系コミュニティが再建された。その後、構成メンバーは入れ替わったものの、福博村会は現在でも生き続けている⁴⁾。

第2項 農業の推移と離農化の進展

福博村を構成する家は、もともとそのほとんどが農家であった。1960～1970年が農業最盛期で、葉野菜が始まり、借地農を含め最大50余戸により低湿地で大量に栽培された。しかし、1976年8月になると、政府による貯水湖建設計画にともない、イペランジャ地区周辺の低地の接収が始まり、それによって、葉野菜栽培農家は5戸に激減した。また、戦前に始まった養鶏も1960年代半ばに「養鶏の村」と呼ばれるほどの隆盛を見たが、奥地の大型養鶏に押されて、1970年代に次第に衰退していった。1960年代半ばに68戸あった鶏卵農家が1981年には9戸にまで減少し、農業は野菜・花卉を中心としたものになった（喜多川・藤木・嶋 1992:104-7）⁵⁾。

このような経緯の中で、1980年頃には交通網の整備等の事情もあり、野菜・花卉の栽培を中心とした近郊農業の価値が高まり、「経済的にきわめて裕福で、農業の機械化が進み、生活に多くの電気器具を取り入れ」「教育にも大いに力を入れている」「近郊一の文化農村」といわれるまでになった⁶⁾。

しかし、この間、次第に離農の傾向も進行し、表11-1のように、戦後直後の1948年に91%であった農家率は1970年には70%になった。1980年代に入ると、やがてベッドタウンになるとの見方もされた⁷⁾。1988年には、非農家の構成員の増大にともなって、福博村会の産業部が文化部に衣替えされ⁸⁾、2001年には福博村の農家率は6割を切り、2006年には50.4%になった。離農した構成員の中には、スザノ市内やリベロンピレス市内の職場に通う者もいる。

表11-1 農家比率の推移

年	農 家	非農家
1948	91%	9%
1960	89%	11%
1964	87.8%	12.2%
1970	70%	30%
2001	57.5%	42.5%
2006	50.4%	49.6%

資料：2001年はサンパウロ人文科学研究所『日系社会実態調査報告書』サンパウロ人文科学研究所、2002年、p. 56、それ以外の年は福博村各種資料より作成。

第3項 人口の減少と高齢化

しかし、近年、福博村における離農傾向は、1980年代初頭に考えられたベッドタウン化につながらず、人口減少をもたらすようになっている。

表11-2は、1931年に原田らがこの地に入植して以降の、人口の推移を見たものである。ここから、1931年の時点で2戸14人であった住民は、1936年には40戸・239人、1948年には153戸、1,008人と着実に増加したことがわかる。さらに、1950年、1960年には人口がやや減少したものの、1970年には戸数（214戸）が200戸を越え、人口（1,512人）が1,500人を越えるまでになっている。この時点では、前述したように、一定の離農傾向が始まっていたが、それが人口減少と結びついていなかった。

しかし、それ以降、さらなる離農の進展が人口減少につながるようになった。事実、1981年には、戸数が144、人口が886人と激減している。しかも、その勢いはとどまることなく、2006年には122戸、461人にまで減少している。

表11-2 戸数と人口の推移

年	戸 数	人 口	男	女
1931	2	14		
1936	40	239		
1948	153	1,008		
1950	142	960	496	464
1960	167	967	493	474
1970	214	1,512	784	728
1981	144	886	444	442
1991	147	681	321	360
2001	128	499	242	257
2006	122	461	219	242

注) 1. 単位：戸、人
 2. 複数の資料で異なる数値があった場合、原則として年次の新しい資料に依拠した。
 3. 数値には、福博村の地区内に居住する日系人も含まれる。
 資料：福博村ホームページ、福博実態調査委員会「福博村実態調査統計図表」1981年、他福博村各種資料より作成。

こうした人口減少は、年齢別に見ると、老人以外の層が少なくなることによって生み出されている。0～17歳の子ども、18～59歳の労働人口は、それぞれ1970年の601人、777人をピークに減少に転じ、2006年で0～19歳の子どもが80人、20～59歳の労働人口が242人にまで低下している。これは、これらの年齢層の人たちが福博村の地域から近隣の都市やサンパウロ市へ転出することによって生じている。

それに加え、近年では日本へのデカセギによって人口減少に拍車がかかっている。福博村の場合、日本へのデカセギ者（1人）が初めて登場したのは1985年である。1986・1987年はいなかったが、1988年に3人、1989年に10人、そして日本の入管法が改定された1990年には一挙に49人がデカセギ経験者になった⁹⁾。その後の詳しい経緯は把握できないが、2001年には福博村人口の13.1%にあたる67名（サンパウロ人文科学研究所 2002:85）、2006年には人口の24.7%、114名が日本へのデカセギ経験者になっている。

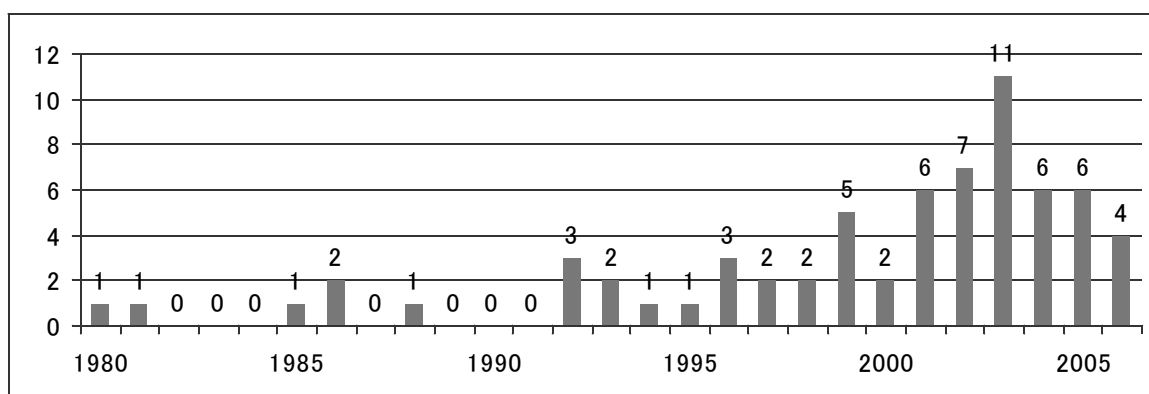
その中で、60歳以上の老人は1970年から1981年にかけて134人から91人まで減少するが、それ以降再び増加に転じ、1991年、2001年、2006年と増加傾向を示している。その結果、2006年現在、60歳以上の老人は139人で全人口の25.1%を占めるに至っている。ブラジル全体の60歳以上人口比率（2001年）が8.6%なので¹⁰⁾、福博村の場合、高齢化水準の高さが際だっている。一人暮らしの高齢者世帯や高齢者のみの夫婦世帯も生み出されている。

第4項 治安の悪化とファベラの拡大

1970年以降の高齢者比率の高まりをとともう人口減少は離農だけが原因ではなかった。治安の悪化とファベラの拡大による居住環境の悪化も無視できない要因になっている。

治安の悪化は、図11-1のように、1980年頃から目立ち始めた。盗難、強盗が目につくようになり、住民は番犬を飼い、サイレンを備え付け、村会でも防犯対策本部や防犯部を設置するなどして、個人的集团的に自衛の手段を講じるようになった。一時期、小康状態になったものの、1990年代に入ると、ふたたび治安の悪化が顕著になり、2002年には福博村会の一人暮らしの老人が強盗に殺害される事件も発生している¹¹⁾。

図11-1 福博村における強盗の年次別発生件数



資料：福博村資料。

治安の悪化と同時に、1990年頃から、福博村周辺ではファベエラが拡大する動きも進んだ。ファベエラはブラジルの都市部に見られるスラムを示す言葉である。ところが、農村地帯の福博村周辺にファベエラが急増している。ファベエラの急増は、前述した政府の貯水湖建設計画による周辺の低地の接収をきっかけにしている。接収された土地のうち水没を免れた低地に不法に住みつく者が現れ、それが拡大したのである¹²⁾。

福博村では、治安の悪化とファベエラの拡大が生活環境の悪化をもたらしてきた。こうした現実が、より安全な場所を求めて転出する動きを促すことは必然的である。しかも、ブラジル経済の混乱が続いていた1990年に日本での入管法が改訂されたため、多くの人びとが安全に確実な所得が確保できる一時的な転出先として、日本に注目するようになった。したがって、2001年に日本へのデカセギ経験者を対象にして行われた調査結果を見ると、福博村の場合、ブラジルへの再適応に関する困難なこととして、「治安の悪化」をあげる者がもっとも多くなっている（サンパウロ人文科学研究所 2002:98-9）。

以上のように、福博村は1970年代以降、離農にともなう転出者の増加によって過疎化、高齢化が進み、ブラジル経済の混乱と治安の悪化が進む中で1990年の日本での入管法改訂を契機に日本へのデカセギが増加した。それによって、さらなる過疎化と高齢化が進展し、一人暮らしの高齢者や高齢者の夫婦家族も生み出されるようになっている。これが、福博村の現状である。

そこで、以下、第3節以降、デカセギ経験者と留守家族を対象にして、デカセギがもたらす現実について、より詳しく検討していく。

第3節 デカセギ者を送り出す／デカセギに行く

第1項 調査の概要

今回の調査では、まず福博村の協力を得て、「現在、家族成員をデカセギに送り出している人々」「以前、家族成員をデカセギに送り出したことのある人々」（以下、「留守家族」）を選び出し、デカセギ状況を確認したうえで、インタビューあるいは質問紙への回答を求めた。さらに、「デカセギから帰国した家族成員」（以下、「帰国者」）が在宅であった場合には、彼らにもインタビューあるいは質問紙への回答を依頼した。なお、「現在デカセギ中で在日本の家族成員」については「デカセギ者」と呼ぶこととする。この場合、「留守家族でもあり帰国者でもある人々」が少なからず存

在するが、これらの人々については可能な限りそれぞれの立場からの回答を求めた。

その結果、多くのケースにおいて、留守家族は向老期の親世代であり、デカセギ者はその子世代であることが判明した。留守家族は60～70代の日系1世と2世中心で、デカセギ者は20～40代の2世・3世中心であった。親子関係以外にも、デカセギする夫とブラジルに残った妻（あるいは妻と子ども）という組み合わせが想定されたが、本調査の対象者にそのようなケースは見られなかった。従って、今回の調査から浮かび上がる福博のデカセギのイメージとは、一家の大黒柱が家族の生活を支えるために行くというのではなく、若者世代が出かけていくというものである。若者の多くは、独身でデカセギに参入し、デカセギ中に家庭をもち、ある者はデカセギを継続し、またある者は帰国する。一方、留守家族である親世代は若い世代のそうした生き方を受け入れ見守る。基本的にはこのような構図であった。そこで、以下においては、主に中高年期の親子関係に焦点をあて、デカセギをめぐる家族あるいは世代間の関係性をみていくことにしたい。

質問紙は留守家族用と帰国者用の2種類を用意した。それぞれの内容の概略は次の通りである。まず、留守家族に対しては、デカセギへの賛否などデカセギの経緯をたずね、それを踏まえて、デカセギ者からの送金の有無を含めた経済生活、日本への好感度、家族や周囲の人々のデカセギ観など、現在の留守家族の生活状況に関する質問をした。デカセギ者との関係については、連絡の手段・頻度、デカセギ者と留守家族に関わって心配されていることを確認した。最後に、デカセギ者の帰国後の仕事や再デカセギの可能性にまつわる思いや期待、留守家族としての経験からもたらされるアドバイスなどをたずねている。回答に際しては、任意のデカセギ者を念頭において答えるよう求めた。また、「以前、家族成員をデカセギ者として送り出したことのある留守家族」の場合は、その当時（過去）のことについて問うた。

一方、帰国者に対しては、デカセギ当時やデカセギからの帰国時のことを質問した。デカセギ前の就業状況をたずねた後に、デカセギの回数・期間・職種・収入の他、ブラジルへの送金、日本での生活についての満足度、帰国意志、日本への好感度の変化など日本でのデカセギについて具体的に問うた。続いて、留守家族との関係については、連絡の手段・頻度、留守家族について心配だったことをたずね、留守家族への質問と対応させた。帰国後の仕事や生活については、デカセギの成果、現在の就業状況、子どもの進学や将来への期待を問い、最後に、再デカセギの意志とそうに考える理由、デカセギ希望者へのアドバイスなどをたずねた。

考察の流れは次のようになっている。まず、デカセギに行くことになった事情、デカセギに行くあるいはデカセギを送り出すにあたっての当事者や家族、周囲の人々の期待や思いを考察する。次いで、日本における就労状況とブラジルでの留守家族の生活を確認し、トランスナショナルなコミュニケーションの密度や、デカセギがもたらした日本観への影響を考える。続いて、帰国の契機とデカセギの成果、帰国後の生活への展望と現実、再デカセギをめぐる態度を探り、最後に、留守家族と帰国者（あるいは留守家族の語るデカセギ者）をめぐる重要と思われる論点あるいは具体的検討課題を整理して、まとめとする。

第2項 基本属性とデカセギ状況

対象者は63人である。福博の世帯員数を2006年の『福博村入植70周年実態調査』（以下、「2006年調査」）に従って461人とする、今回インタビューあるいは質問紙への回答を得られたのは全体の1割超に相当する人々ということになる。複数の対象者が同一世帯に属しているのはごくわずか

なケースしかないため、全世帯数122戸（2006年調査）のうち、留守家族あるいは帰国者を含む世帯はおよそ5割となる。2002年のサンパウロ人文科学研究所（編）『日系社会実態調査報告書』（以下、「2002年報告書」）における当該比率はおよそ3割であることから（サンパウロ人文科学研究所 2002:40）、デカセギがより多くの世帯に浸透しつつあるといえる。対象者の内訳をみると、留守家族は43人、帰国者は27人である。留守家族と帰国者の合計が対象者合計より多いのは「留守家族でもあり帰国者でもある人々」がいるためである。その人数は7人、30代1人、50代1人、60代4人、70代1人である。30代の1人がきょうだいをデカセギに送り出しており、他の6人は子ども世代をデカセギに送り出していた。

まず、留守家族数と帰国者数からデカセギ経験者数を算出してみよう。デカセギ経験者数をデカセギから帰ってきた人々＝帰国者数と考えるならば、2002年報告書では67人、2006年調査では49人、本調査では27人である。あるいは、デカセギ経験者数を帰国者数と現在もデカセギをしている人々＝デカセギ者の合計と考えるならば、2006年調査では114人である。本調査においては、各留守家族にデカセギ状況をたずねて集計したところ、計76人をデカセギに送り出しており、計49人を帰国者として迎え入れていた（本調査の対象者となった帰国者27人はこの49人のうちの一部に相当する）。従って、デカセギ経験者は計125人となる。デカセギ者についての2002年データがないため明言はできないが、2006年調査とそれから2ヶ月後の本調査の比較だけでも、「帰国者はより少なく、デカセギ者はより多く」という流れをうかがうことができる。以下において取り上げるのは、このようなデカセギ状況における留守家族43人と帰国者27人である。

まず、留守家族についてみてみよう。男性が約7割を占める。先述のように、留守家族の多くはデカセギ者の親世代であるため、年齢は50代以上が92.1%にのぼる。中心をなすのは60～70代であり、この年齢帯だけで7割に達する。年齢が高いので当然ながら有配偶率は高い（8割）が、男性より長寿傾向にある女性には配偶者と死別した者もみられた。福博全体では、50代以上が人口の45.4%、65歳以上に限ると20.8%に達しているが（2006年調査）、留守家族の成員の高齢化はそれをはるかに上回るものである。この点は留守家族の特徴といえるだろう。

高齢化は世代構成が示すところでもある。1世が3割、2世が5割、3世が2割であった。福博全体における1世と2世の比率は年々低下しており、2002年報告書では6割を占めていたのが（サンパウロ人文科学研究所 2002:64）、2006年調査では5割に下がるなかで、留守家族においては1世と2世の割合がとりわけ高い。また、学歴が全体として低めの傾向にあることも年齢層の高さから説明されよう。若い世代も含めた全体の学歴においては、小学校卒と中学校卒の合計が5割超、高校以上の進学者が4割を超え、そのうち大学卒も2割いる（2006年調査）のに対して、留守家族においては、小学校卒だけで半数に至り、中学校卒と高校卒がそれぞれ2割という結果である。

職業は、農業およびその周辺の仕事（農地の貸地、野菜卸、フェーラ¹³⁾、造園業、苗木栽培・販売、養鶏業、卵卸など）に就く者が過半数を超える。既に指摘されたように近年は農業から離れる人々も増えているが、留守家族に関しては家業である農業を守っている人々が相対的に多い。2006年調査においては、農業が3割、農業以外が3割、家事・学生・年少者が3割、無職が1割であることと比べると、本調査では農業従事者がかなり多いという結果であった。もっとも、この2006年調査の「農業3割」という数字は、家業（農業）を共に担う妻が「家事」従事者に分類されているケースが多いためと思われ、妻を農業従事者として数えるならば、農業に就く者の比率は高まると

考えられる。暮らし向きについて問うたところ、家族がデカセギに行く前の生活水準に関する認識は、留守家族においては「中の中」5割弱、「中の下」3割弱であるが、「中の上」「上」も計2割を占め、中程度との認識が最多であった（表11-3）。

続いて帰国者についてみると、帰国者も男性が7割を占める。年代は30代が中心で、20代、40代をあわせると6割以上となる。20～40代の合計が6割に達するのは2002年報告書における調査結果と同じである（サンパウロ人文科学研究所 2002:85）。ただし、年代毎にみると、報告書では20代が4割であるのに対して本調査では30代が4割となっており、上の年代にシフトした構成となっている。彼らは、1回目のデカセギ当時は7割弱が独身、2回目でも約半数が独身であった。2002年報告書におけるデカセギ時の既婚率（5割）（サンパウロ人文科学研究所 2002:89）と比べると独身者の比率が高いことがわかる。

現在の有配偶者率は4割ほどで9人が子どもをもつが、子ども帯同のデカセギを経験した者は2人、子どもをブラジルに残してのデカセギを経験した者は4人であった。このように、今回の調査において、子育てとデカセギを両立させた経験をもつ帰国者が少ないのは、独身でデカセギに行き、デカセギ先で家庭をつくり、そこに落ちていて子どもを育てる者が増えてきたためと考えることができる。というのも、日本で子どもを育てはじめたデカセギ者の場合、家庭を支えるための収入確保のため、あるいは子どもによりよい生育環境を与えるために、帰国を先延ばしするという選択がおこなわれるようになったと推察されるからである。つまり、子育てをしているデカセギ者は帰ってこないのではないかということである。

世代構成をみると、留守家族よりはひと世代若い人々が中心である。2世が半数を占める点は留守家族と変わらないが、1世は1割に過ぎず、そのかわりに3世が3割に増える。世代比率は2002年報告書におけるものと変わらない（サンパウロ人文科学研究所 2002:84）。高校以上の教育を受けた者が7割であり、これは福博全体（4割）のなかではかなり高い。さらに、大学・専門学校・大学院の卒業者に限ると3割という数字であり、留守家族に比較すると、圧倒的な高学歴となっていることがわかる。

帰国者の職業は農業と自営業で6割に達する。デカセギ前の生活水準をみると、帰国者は「中の上」「上」がほとんどゼロに近く、「中の中」6割弱、「中の下」3割超であり、留守家族よりも自己評価が若干低い傾向にあった¹⁴⁾（表11-4）。

表11-3 家族がデカセギに行く前あなたはどの階級に属していたと思うか（留守家族）（単位：人、％）

	上	中の上	中の中	中の下	下	合計
実 数	3	5	19	11	2	40
構成比	7.5	12.5	47.5	27.5	5.0	100.0

表11-4 デカセギに行く前あなたはどの階級に属していたと思うか（帰国者）（単位：人、％）

	上	中の上	中の中	中の下	下	合計
実 数	0	1	14	8	1	24
構成比	0.0	4.2	58.3	33.3	4.2	100.0

第3項 デカセギの目的と留守家族の賛否

デカセギの第1の目的が経済的なものであることは、これまで多くの先行研究が指摘してきたところである。この点においては福博村も例外ではない。帰国者の最長職とデカセギ直前職は、いずれも、農業4割、学生・生徒3割、自営業2割という構成であるが、そのうち5割の人々が直前職の賃金などに不満をもっていたと述べており、農業や自営業の先行き不安、学校卒業後の職探しやマッチングへの不安などがデカセギに押し出す力となったと考えられる。

一方、親世代である留守家族にデカセギへの賛否を問うと、「デカセギに反対する理由がみつからない」という意味での消極的賛成も含めた賛成が7割超を占めるという結果となったが、その語りはもう少し複雑である。即ち、そこにはふたつの要素が含まれている。ひとつは、デカセギを経済的手段としてとらえようとする視点であり、デカセギは生活程度上昇計画・老後計画のための手段としてとらえられる。もうひとつは、日本を見聞する機会としての位置づけを強調しようとするものである。これは、働きながら日本を知ることが重視する視点である。2002年報告書をみても、4割がデカセギ目的として「日本を知る」をあげているが、本調査でも、留守家族の多くが何らかの言い回しで、日本行きが経済的理由だけではないことを語っている。このことは即ち、経済的目的を第一にあげることに對して何らかの心理的抵抗があることを思わせる。それなりの暮らし向きが維持されているとの自負がある場合、そこ子どもには「社会見学」としての日本行きが勧められたということである。

例えば、生活水準を「上」と回答したある留守家族（2世）にとって、日本は稼ぎ場ではなく「心のふるさとのようなもの」である。デカセギとは、家族に自分のルーツをみせるための旅であり、そのことは、自分のこれまでの生き方を家族にあらためて承認させるという意味を帯びている。「働くというより経験。私のお父さん、お母さん、日本なので」「大学に行かないというので、日本を見ておいでと父が勧めた」といった発言がきかれた。子世代がお金第一であることを隠さず、デカセギに込み入った理由付けを必要としないのとは対照的といえよう。

第4項 デカセギに対する周囲の関心

上でみたように、家族はデカセギ目的として経済的理由を強調していない。デカセギに対する家族の関心のありようをみると（表11-5）、7割が「外国での苦勞への勞り」と「日本での生活への関心」を示すが、「お金」や「技術習得」への期待を「かなり感じる」「やや感じる」の合計は約5割にとどまる。留守家族の成員において「お金を持ち帰ってほしい」という期待はそれほど高くはない。これは、帰国者の話などから情報を得て、デカセギの経済的成果や技術習得がそれほど期待できないことを既に知っているせいでもあろう。代わりに、社会経験としての側面が強調されているところがある。しかしながら、日本を見に行くことや日本での生活を経験することに積極的な価値が与えられているにもかかわらず、日本人とのつきあいを勧める声はきかれなかった。「日本語わかるが生活環境は違う」ということばに表れているように、実際に日本人とつきあうことの難しさがあらかじめ認識されているからであろうと思われる。

留守家族がデカセギに対して示す態度は、このように、デカセギに行く者に過大な期待を負わせるようなものではなく、むしろ、見守り的な態度にみえる。これは、留守家族の多くが彼らの親であること、デカセギ者に経済的に依存する程度が低いことによるとと思われる。

続いて、留守家族からみた周囲の人々のデカセギへの反応をみると（表11-6）、身内の場合と比

べてデカセギへの関心度は低い傾向にある。これは、ひとつには、デカセギが珍しい現象ではないために、人々の関心を呼ぶ話題ではなくなっているからである。「みんな行ってるから関心ない。給料の平均もわかるしね」「デカセギがあたりまえで珍しくないから」ということばが示す通りである。もうひとつは、デカセギ者がいずれなにがしかの金銭を持ち帰ったときに犯罪の被害者とならぬよう、デカセギが意図的に伏せられることもあるからと考えられる。「(近隣の) デカセギのことは、知っていても話題にしない。何があるかわからないから」との発言がまさにそれである。このように、家族周辺の人々がデカセギに寄せる関心は表向き低調あるいは慎重なものであった。

表11-5 家族の他の成員はデカセギをどのように考えているようにみえるか(留守家族) (単位:人、%)

		かなり感じる	やや感じる	あまり感じない	殆ど感じない	合計
お金への期待	実 数	12	6	12	8	38
	構成比	31.6	15.8	31.6	21.1	100.0
技術習得への期待	実 数	14	7	7	9	37
	構成比	37.8	18.9	18.9	24.3	100.0
外国での苦勞への労り	実 数	7	9	1	4	21
	構成比	33.3	42.9	4.8	19.0	100.0
日本での生活への関心	実 数	13	12	3	6	34
	構成比	38.2	35.3	8.8	17.6	100.0
あまり関心なさそう	実 数	3	3	11	6	23
	構成比	13.0	13.0	47.8	26.1	100.0

表11-6 デカセギに対する周囲の人々の反応はどのようなものか(留守家族) (単位:人、%)

		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	合計
お金への関心・羨望	実 数	10	3	11	10	34
	構成比	29.4	8.8	32.4	29.4	100.0
技術習得への関心・羨望	実 数	6	7	11	8	32
	構成比	18.8	21.9	34.4	25.0	100.0
デカセギ情報への関心	実 数	3	6	9	10	28
	構成比	10.7	21.4	32.1	35.7	100.0
外国での苦勞への同情	実 数	6	6	8	9	29
	構成比	20.7	20.7	27.6	31.0	100.0
日本での生活への関心	実 数	4	6	7	10	27
	構成比	14.8	22.2	25.9	37.0	100.0
日本文化への関心	実 数	7	5	6	9	27
	構成比	25.9	18.5	22.2	33.3	100.0
あまり関心なさそう	実 数	5	1	10	5	21
	構成比	23.8	4.8	47.6	23.8	100.0

第4節 デカセギ者とつながる／留守家族とつながる

第1項 日本でのデカセギ生活

まず、日本での就労状況を確認する。日本での就労地は、帰国者、デカセギ者あわせると、東京都、神奈川県、群馬県、長野県、三重県、愛知県、福井県、静岡県、岐阜県、山梨県、茨城県、福岡県など広範囲にわたる。滞日期间は長期化の傾向にあり、5～6年続けて滞日した経験をもつ者も8人おり、1回の滞日が3年以上であるケースが主流になってきている。デカセギ経験回数をみると、2002年報告書では、1回が6割、2回が3割、3回は4.6%、2006年調査では、1回が6割、2回が2割、3回が1割という結果で、いずれも1回経験者が最も多かった。これに対して、今回の調査では2回が最多で6割を占める。1回が3割弱で、デカセギを3回経験しているのは1割ほどであった。このことは、デカセギ者が「帰国とデカセギを繰り返す人々」と「デカセギに出かけ

たきり帰国しない人々」とに分化しつつあり、後者が増加しているために、帰国者における複数デカセギ経験者の比率が上昇するに至っている、と解釈することができるだろう。

日本における就労について指摘されることは3点ある。1点目は、先行研究においても指摘されてきたように、製造業が圧倒的に多いことである。全体の8割にのぼる。電機・自動車関連製品の生産・加工が大多数を占めるが（7割）、コンピュータなどの精密機械、ソーラーシステム、建設機械、エレベータなどの部品生産・加工もある。デカセギ前の職業や学校で学んだ知識・技術を活かせるような仕事とはいえない。たびたび職場を移ることはめずらしいことではなく、デカセギ者が現在どこでどのような仕事をしているのかを十分に把握していない留守家族も多い。デカセギに行った子ども（きょうだい5人）が10年以上同じ会社で働き、現在は、きょうだい5人とその配偶者および孫の合計12人がそこで一緒に仕事をしているというケースもあるが、こうした働き方は極めてまれといってよい。

しかしながら、帰国者だけではなくデカセギ者の仕事もあわせて検討するならば、わずかながら、コンピュータソフト開発や建築、建材関係、造園設計の会社に職を得た者もあり、これらは、それぞれ、大学での専攻、デカセギ前職（大工）、家業（造園業）に直接つながる職業に恵まれた珍しいケースといえるだろう。この他、日本語通訳、弁当屋、ラーメン屋、布団工場、フォークリフトの運転手が各1ケースあった。

2点目は、「病院の家政婦」「病院のヘルパー」という女性のデカセギ職の存在である。若い世代のデカセギが多いなかで、この仕事の経験者3人の仕事開始時の年齢は50代である。仕事の内容は、老人の世話、病院職員の食事づくりや、その他細々とした雑用をすることであった。これらの、いわゆる「付添婦」はシニア女性のデカセギ職としてはよく知られているものである。付添婦は、しばしば過重な労働であり、住み込みに近い形で長時間拘束されるものの、女性が高給を稼ぐことのできる数少ない職業であった。

3点目は、日本語能力の重要性である。日本語に堪能であることは就職の決め手となり、さらには、職場における地位を高めたり、安定的なものにしたりすることに大いに貢献している。ある者は、日本語能力を買われて通訳の仕事を担当することになり、日系労働者の取りまとめや雇い主との関係調整などが主な業務となった。ラインで働くのに比べれば、ややホワイトカラー的な立場に移行している。しかし、デカセギ者が2世、3世によって占められるようになった今、達者な日本語を話すことを彼らに期待するのは難しく¹⁵⁾、状況は変わりつつある。

第2項 留守家族の生計とデカセギ者からの送金

ところで、デカセギ者不在の間の留守家族の生計手段をみると、彼らも自身の収入手段をもち、基本的にその収入によって生活する体制となっている。その収入手段とは主に自営業、具体的には農業および農業周辺の仕事（養鶏業、卵卸業、苗木栽培販売など）が多くを占める。自営業は、雇い主として働くのとは異なり、規模を縮小して続けていくことも可能である。従って、無業状態にある者は極めて少ない。農業の場合、特に、自身の高齢化とデカセギによる農業従事者数の減少により、経営規模の縮小が目立つ。農地として売却したくとも買い手が見つからないという状況があるため、土地の大部分を農地として「貸地」している人も少なからずいる。周辺では、元の農地が別荘地として小さな区画で切り売りされるケースも増えている。

このように生計維持している留守家族にデカセギ者からの送金の有無を問うたところ、定期・不

定期あわせて送金を受け取っている比率は約4割であった。ただし、この数字は、帰国者がデカセギ者であったときの送金を含めての回答である。帰国者自身に送金についてたずねると、定期もしくは不定期で送金していた比率は7割にのぼる。この7割という数字は、帰国者のうち現在は留守家族でもある年長世代が、自らのデカセギ時に留守家族の家計維持のための送金をしていたことによって引き上げられたものと思われる。というのも、現在の送金の使途としては、生活費の足しにするとの回答は少なく、家の建築・修繕といった特別の出費に充てるというものが多いからである。ただし、送金されたものが留守家族の家を新築する費用の一部として使われている場合でも、その家が送金をした本人にいずれ譲り渡される予定となっており、結局のところ、デカセギ者自身の資産形成となっているケースもみられる。これは、子世代が自分の家庭を優先することが認められ、あるいは、独身の子どもが将来のために自身の収入を蓄えることが許されているということである。子ども世代からの送金に対して8割以上の留守家族の成員が「十分だ」「まあまあ十分だ」と答えているが、こうした態度は、親が子どもに頼らずとも生きていけるだけの経済的基盤をもっていることに支えられたものといえる。

第3項 家族のつながり——留守家族、デカセギ者それぞれの心配

このように、留守家族は、デカセギ者に対して送金への強い期待はみせず見守り的な態度をとるなかで、彼らの「健康」と「仕事」への気遣いをみせる。このふたつをあわせると5割になる。「心配なし」は2割である。「子どもの教育・進学」を挙げる者がいないのは、第一に、デカセギ者の多くが独身であり、家庭をもっているとしても、子どもがまだ幼いためであろう。帰国者の帯同していた子どもも当時は小学生であった。加えて、留守家族が日本とブラジル双方の教育制度や学習言語の重要性といった問題に疎く、両国の学校教育の接続の可否についての認識が不足していることも一因と思われる。

一方、デカセギ者不在の間の留守家族の生活については「心配はない」が4割、「健康」「ブラジルの治安」「ブラジルの経済状況」「仕事」がそれぞれ約1割を占める。これに対して、帰国者が留守家族に関して抱いていた心配ははるかに大きく、「心配はない」は1割未満である。およそ3割が留守家族の健康を案じており、次いで関心が高かったのが治安の問題である。「健康」「ブラジルの治安」「家計」「高齢の親」の合計は8割近くにのぼる。留守家族が親世代中心であるため、高齢化とそれに伴う健康不安が一番の心配となっていた。

連絡の手段としては、ほぼ全員がインターネットを挙げている。単身のデカセギ者はインターネットを利用して家族とやりとりをしているが、高齢の留守家族についてみると、パソコン操作に不案内である場合や仕事では使用するが私事では使用しない習慣であるなど、利用頻度は必ずしも高くなかった。

第4項 日本に対する好感度

以上みてきたように、デカセギをめぐるのは、留守家族、デカセギ者それぞれの期待や心配、願いや諦めが交錯している。そして、デカセギ者を送り出す経験、デカセギ者となる経験をすることは、デカセギ先である日本という国に対する好感度を揺るがせる契機ともなる。

はじめに、帰国者のデカセギ当時の生活満足度をみると、「留守家族と離れていること」を除いては、「大変満足」「まあ満足」の合計がおしなべて7割を超す（表11-7）。なかでも、「物質的な豊かさ」「生活上の便利さ」「治安のよさ」に関する評価は高く（9割超）、高い満足度が示されるが、

他のブラジル人や日本人との交流についての満足度はそれより低い。同僚あるいは地域の仲間としての交流は、職場環境や地域性など多くの条件によるところが大きいとはいえ、もともと交流への意欲が高かったわけでもなく、満足度もその意欲の低さに対応したものとなっている。

こうした満足度は帰国者の日本に対する好感度を高め、「以前から好感をもっているが、デカセギでさらに好感が増した」が最多で4割を占める。日本に対して否定的な感情を表明する者は2割もおらず、6割が「好感増」と回答し、8割が「現時点で好感あり」と回答している（表11-8）。彼らの日本への好感度を留守家族のそれと比べると（表11-9）、留守家族の日本に対する好感度はデカセギによってそれほど変化していないことがわかる。「以前から好感をもっているが、デカセギで好感は変わらなかった」が6割にのぼり、彼らの日本への好感は安定している。これは、留守家族が向老期の1世や2世であり、もともと日本に対して強い愛着をもっているためであろう（第3節第3項）。

表11-7 日本の生活にどの程度満足していたか（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

		大変満足	まあ満足	少し不満	かなり不満	合計
治安のよさ	実 数	18	6	1	0	25
	構成比	72.0	24.0	4.0	0.0	100.0
日本人との交流	実 数	7	15	3	0	25
	構成比	28.0	60.0	12.0	0.0	100.0
物質的豊かさ	実 数	17	7	1	0	25
	構成比	68.0	28.0	4.0	0.0	100.0
生活上の 便利さ	実 数	15	8	2	0	25
	構成比	60.0	32.0	8.0	0.0	100.0
文化・習慣 の違い	実 数	6	14	4	1	25
	構成比	24.0	56.0	16.0	4.0	100.0
他のブラジル 人との交流	実 数	5	14	5	1	25
	構成比	20.0	56.0	20.0	4.0	100.0
留守家族と離 れていること	実 数	1	2	13	9	25
	構成比	4.0	8.0	52.0	36.0	100.0
全体として	実 数	7	17	0	1	25
	構成比	28.0	68.0	0.0	4.0	100.0

表11-8 日本への好感度はデカセギの前後で変化したか（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

	前から好感 さらに好感	前から好感 変化なし	好感無から 好感増	好感無に 変化なし	好感無から さらに減少	合計
実 数	10	5	5	4	0	24
構成比	41.7	20.8	20.8	16.7	0.0	100.0

表11-9 日本への好感度は、家族がデカセギに行って変化したか（留守家族）（単位：人、％）

	前から好感 さらに好感	前から好感 変化なし	好感 減少	好感無から 好感増	好感無に 変化なし	好感無から さらに減少	合計
実 数	7	21	2	2	1	1	34
構成比	20.6	61.8	5.9	5.9	2.9	2.9	100.0

第5節 デカセギ者の帰国を待つ・帰国者を迎える／デカセギから帰る

第1項 デカセギの成果と帰国のタイミング

それでは、帰国者はデカセギの成果として何を持ち帰ったのだろうか。また、デカセギ当時、帰国についてどのような見通しをもっていたのだろうか。帰国者に帰国のタイミングをたずねたところ、「お金が貯まったら帰国する」と考えていたとの回答が5割で最多であった（表11-10）。デカセギで何がどの程度達成されたのかを問うた結果をみると（表11-11）、不動産資金、事業資金、技術技能習得については「十分できた」「まあまあできた」の合計が4～6割にとどまり、生活資金以外の各種資金を十分に稼ぐことは難しかったとの認識であった。これに対して、「ブラジルでの生活資金」を稼ぐことと「日本語や日本の文化」を学ぶことに同様の成果があったと認識する者は8割に届くほどである。「日本人の友人・知人が増えた」についても、「十分」あるいは「まあまあ」の成果を7割が認めている。しかし、7割という数字にもかかわらず、帰国者が日本人との交流を実り多いものとして記憶しているとは必ずしもいえない。自らが直接差別の対象とならずとも、日本人については、「ブラジル人のことを自分より下にみる。差別的。ばかにする。よそ者を排除する」といった印象をもつ者も少なくなく、日本で知り合ったデカセギ仲間との交流は帰国後も続くのに対して、日本人とのつながりは帰国後には途切れてしまうケースがほとんどであった。

一方、留守家族におけるデカセギ者の帰国の見通しをみると、家業（農業や商店経営）をもつ場合は、帰国への強い期待がもたれるが、帰国後の仕事を確実に提供できるゆえに、帰国のタイミングにはあまり頓着されない。逆に、帰国後に本人が仕事を探さなければならない場合は、仕事探しの困難さゆえに、「無理して帰らずともよい」と発言される傾向があった。例えば、デカセギ中の息子については、「家を買って（日本に）長く滞在したいと思っているようだ。どうせ長くいるなら20～30年いて、帰ってきてから老後までゆっくりできるくらい稼いでくれればよいとは思うけど」という発言がある。留守家族である父親は、既に農地を親族にゆだねて卸業に転業しており、息子に農業を継がせる意図はもっていない。

このように、デカセギが結果的に長期化するかどうかは、帰国後の経済生活の見通しの有無によるところが大きく、それは即ち、帰国後にどのような仕事に就けるか、その内容と確実性が大きな意味をもっていた。

表11-10 日本にいたとき帰国についてどのように考えていたか（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

	何があってもとにかく帰国	ブラジルの経済状態が改善したら帰国	お金が貯まったら帰国	高齢になったら帰国	とにかく日本に残りたい	よい仕事があったら日本に残りたい	日本に家族を連れてこられたら残りたい	日本の習慣に慣れたら残りたい	その他	合計
実数	9	1	14	1	0	0	0	0	2	27
構成比	33.3	3.7	51.9	3.7	0.0	0.0	0.0	0.0	7.4	100.0

表11-11 デカセギで次の項目がどの程度達成されたか（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

		十分できた	まあまあできた	あまりできなかった	まったくできなかった	合計
ブラジルでの生活費	実 数	5	13	4	1	23
	構成比	21.7	56.5	17.4	4.3	100.0
不動産・住宅資金	実 数	4	6	7	6	23
	構成比	17.4	26.1	30.4	26.1	100.0
事業資金	実 数	2	12	6	3	23
	構成比	8.7	52.2	26.1	13.0	100.0
技術・技能習得	実 数	1	11	6	4	22
	構成比	4.5	50.0	27.3	18.2	100.0
日本語・日本文化学ぶ	実 数	6	13	4	1	24
	構成比	25.0	54.2	16.7	4.2	100.0
日本人の友人増やす	実 数	7	10	5	2	24
	構成比	29.2	41.7	20.8	8.3	100.0

第2項 帰国後の仕事

では、帰国者のために留守家族はいかなる職業を望むのだろうか。表11-12にあるように、「その他」を除くと「自営業」の3割弱がいちばん多い。ただし、帰国者の起業に対しては非常に慎重な態度がとられている。それは、デカセギで資金を十分に蓄えることの困難性についての共通認識があるからと思われる。実際、ある男性（帰国者でもある留守家族）は、1991年に、「10年は（日本に）いるつもり」で「リゾートにペンションを買い、これを人に貸して、日本の年金と家賃で老後を暮らしたい」、それまでは「日本とブラジルを行き来して暮らす予定」と述べていたが（喜多川・藤木・嶋 1992:113）、その後デカセギは7年で切り上げることとなり、15年経った2006年の時点では、フェーラを営み、ペンションを買うには至っていない。

従って、留守家族においては、リスクの高い起業よりは家業（その多くは農業）を継いで少しでも安定した生活をするのが望まれており、自営業3割とは主に農業承継を望む比率とみることができる。ここで「農業」という回答が選択されていないことは、留守家族が従来の農業のあり方に行き詰まりを感じていることを示していると考えられ、新しい農業あるいは農地を利用した新しい仕事の広がりへの期待が「自営業」という項目を選択させたものと思われる。例えば、ある留守家族は「自営業」という回答を選択したうえで、「土でつくったものの倍で売れる」として水耕栽培を勧め、また、「現在使っていない土地があるので、（農業でも農業でなくても）自由に土地使って何かやればいい」と語る。農業およびその周辺の仕事に就いている留守家族が過半数を超えることを考えるならば、家業ではなく、もっと別の安定した職に就かせたいという希望も少なからずあるということになるが、具体的な当てがあるわけでもなく、「本人任せ」「何でもよい」といった発言止まりであった。

このとき、特に家業の後継者が求められているような場合には、娘よりも息子に対する期待が強く、帰国に合わせて新規事業（前出の水耕栽培など）が検討されるなど、息子の帰国への関心の方が相対的に高まる。そして、複数の息子がデカセギしている場合には、後継者たるひとりに対してより高い関心が示され、その帰国がより強く望まれていた。息子の帰国が望まれるもうひとつの理由としては治安問題があげられる。夫を亡くした60～70代の女性の独り暮らしや単身での商売は危険であるとの認識が強く、スザノ市中心部への転居が計画される場合もある。その意味で、息子（あるいは息子一家）の帰国は、母親がこの地で暮らし続けるための「要件」でもある。福博のリーダーたちは、「転出者のふるさととしてのムラ」「村内居住者と転出者との連帯シンボルとなるムラ」

としての再活性化をうかがっているといわれるが、それは、デカセギ者の帰国のありようにかかっているのである。

このような留守家族の期待に対し、帰国後なんらかの仕事に就いている帰国者は6割である。この6割という数字は2002年とかわらない（サンパウロ人文科学研究所 2002:91）。デカセギ前に学生であった者が3割いたが、帰国後復学したという回答はなかった。勉学への意欲がデカセギによって中断させられてしまう傾向がみえる。仮に復学したとしても最終的に卒業するのはまた難しく、2002年のデータでは、復学して卒業しなかった者も含めると半数以上が卒業することなく学校を去っている（サンパウロ人文科学研究所 2002:92）。教育熱心という日系ブラジル社会の「伝統」、あるいは、高い教育をおさめることで社会的上昇をはかるという彼らの「戦略」の揺らぎがうかがわれる現象である。帰国後の職業をみると、やはり自営業の比率が高く（表11-13）、「農業」と「自営業」をあわせると6割になる。帰国後の職業として自営業が好まれることは先行研究において指摘されているところであるが¹⁶⁾、今回の調査は在福博村の帰国者を対象としていることもあり、結果として、家業である農業とその関連事業に従事する者が多くなっている。薬剤師として家業の薬局経営の跡取りとなったケースと、家業は農業であるが本人は薬剤師として病院に勤務するケースを除いては、クレソン栽培、キノコ栽培卸、野菜卸売り、フェーラ、販売業（庭木）などが主な仕事である。

現在の仕事に関しては、賃金が低いことや貯蓄が難しいことに対する不満もみられるが、総じて不満を表明する者は少なく、8割は転職を望んでいない。帰国者の多くは、デカセギにおいて不動産や事業のための資金を十分に稼ぐことができなかったとしても、生活資金についてはそれなりのものを手に入れたと感じている。デカセギを経て生活水準がいくぶん上昇したと認識する者が増えていることがそれを裏付けよう。デカセギ前は、「中の中」6割、「中の下」3割だったのが、帰国後は、「中の中」7割、「中の下」2割となっている。

表11-12 帰国後就いてほしい仕事（留守家族）（単位：人、％）

	公務員	農業	自営業	主婦	学生・生徒	その他	合計
実数	2	1	9	2	1	19	34
構成比	5.9	2.9	26.5	5.9	2.9	55.9	100.0

17選択肢のうち実数がゼロでなかったものについて表示

表11-13 帰国後の現在の仕事（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

	公務員	教員	会社管理職	事務営業	技術職	工員	銀行員	医師	看護師	研究職	農業	店員販売員	自営業	主婦	失業	学生生徒	その他	合計
実数	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	6	0	5	1	1	0	2	18
構成比	0.0	0.0	11.1	0.0	0.0	5.6	0.0	0.0	0.0	0.0	33.3	0.0	27.8	5.6	5.6	0.0	11.1	100.0

第3項 再デカセギの可能性

デカセギから帰国した後の人生の選択肢には再デカセギも含まれる。

まず、留守家族についてみると、「再デカセギしてほしくない」という回答が7割を占めた。2002年報告書でもその比率は同じく7割である。再デカセギを望まないのは、デカセギという変則的な生活がもたらす悪影響を憂慮するからである。具体的に問うた結果は表11-14の通りである。「あて

はまる」「ややあてはまる」の合計をみると、「ブラジルで生活できる」「家族が離れて暮らすのはよくない」の2項については9割、「子どもの教育が心配」は7割、「外国で暮らすのは苦痛」が6割であった。デカセギによって今より安楽な生活ができることよりも、家族と一緒にいることの方が重視されている。加えて、後でもふれるように、今後は、高齢化する自分たち親世代を側で支えてほしいという本音もあるように思われる。

次いで、帰国者の再デカセギの意向を探ると、留守家族と同じく、「行きたくない」との回答が圧倒的に多く、8割を超える。理由としては、やはり、ここにおいても、「ブラジルで生活できる」「家族が離れて暮らすのはよくない」という意見が強い（表11-15）。家族と離れることは、ストレスとなると同時に、さまざまな問題が引き起こされる原因となりうると考えられている。この他、年齢の問題もある。再デカセギに行こうと考えている者が20～30代に集中しているところから、年齢の上昇とともに、デカセギ先で納得のいく仕事をみつけることが難しくなるという現実も理由のひとつをなしていると思われる。

再デカセギに関する認識は、「デカセギを経験した者としてデカセギ希望者へどのような助言をするか」という問いへの答えにも見出すことができる。というのも、それらの助言には、彼らが自らのデカセギをどのように総括しているのかが表れているからである。「がんばれば自分の思い通りになる。だらだらしているひとはどこに行っても成功しない」「がんばって働いて、がんばっていい仕事して。そこのルールに従うこと」などの発言をみると、目的意識をもつことの重要性が唱えられるとともに、目的意識を持ち続けることの難しさが指摘され、さらには、そうした意識を無くさないようにとの忠告がなされていることがわかる。ただし、この助言をしているのが、「帰国を選び、帰国することができた（帰国せざるをえなかった）人々」である点は考慮されるべきだろう。つまり、彼らは自らの選んだ「帰国」という選択を肯定するためにも、目的意識をもって一生懸命稼ぎ「早々に帰国する」ことを勧めるのであり、また、帰国後の生活が成り立つことを強調すると考えられるからである。

表11-14 再デカセギに行ってほしくないのはなぜか（留守家族）（単位：人、％）

		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	合計
ブラジルで生活できる	実 数	9	4	0	1	14
	構成比	64.3	28.6	0.0	7.1	100.0
家族が離れるのはだめ	実 数	11	2	0	1	14
	構成比	78.6	14.3	0.0	7.1	100.0
子どもの教育心配	実 数	6	4	0	3	13
	構成比	46.2	30.8	0.0	23.1	100.0
外国暮らしは苦痛	実 数	2	6	3	2	13
	構成比	15.4	46.2	23.1	15.4	100.0

表11-15 再デカセギに行かないのはなぜか（デカセギ帰国者）（単位：人、％）

		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	合計
ブラジルで生活できる	実 数	10	5	0	0	15
	構成比	66.7	33.3	0.0	0.0	100.0
家族が離れるのはだめ	実 数	11	2	1	0	14
	構成比	78.6	14.3	7.1	0.0	100.0
子どもの教育心配	実 数	5	3	0	4	12
	構成比	41.7	25.0	0.0	33.3	100.0
外国暮らしは苦痛	実 数	5	6	3	1	15
	構成比	33.3	40.0	20.0	6.7	100.0

第6節 デカセギをめぐる問題と今後

第1項 家族関係の再編成——帰国する者・しない者

留守家族においても、帰国者においても、再デカセギへの意欲は高くない。しかし、それでも、現実には、何度もデカセギを繰り返す人々がいる。梶田はそれを「デカセギは新たな職業に就く手段というよりは、それ自体が常態化し、デカセギという新たな職業ないしパターンが定着しつつある」（梶田 1998）と分析した。先にも見たように、留守家族にデカセギに対する賛否を問うと賛成意見が7割を超える。にもかかわらず、再デカセギについては、それを望まないとする者が留守家族で7割、帰国者自身において8割である。このような結果となった理由のひとつは、本調査の対象者の年齢構成にもある。つまり、帰国者の半数近くを40代以上が占めていることである。3割ほどが60～70代の年配者である。彼らの多くは帰国後10年以上経っており、今後のライフプランにおいて自身の再デカセギという選択肢そのものをもたないと思われる人々である。再デカセギを望むと回答しているのは、すべて20～30代初めの人々であった。

上記のことをふまえて、デカセギには賛成するが再デカセギを望まない者が多いという状況が何を示すのかを今一度考えてみよう。ここから確認できることは、デカセギ経験の意義を認めつつデカセギが常態化することには否定的な認識が、留守家族と帰国者に共通して見受けられるということである。その背景には、2002年報告書で指摘されるように、福博全体としての過疎化の問題がある。帰国者が就くべき仕事は十分にはなく、さらに、向老期にある留守家族は、老後生活をどの子どもが支えるかという切実な問題を抱えている。こうしたなかで、デカセギの常態化はデカセギ者を二分する状況を生み出している。先に、デカセギ者が「帰国とデカセギを繰り返す人々」と「デカセギに出かけたきり帰国しない人々」とに分化し、後者が増加するに従って前者が減少しつつあると指摘したが（第4節第1項）、それは即ち、「帰国してブラジルに経済基盤を築くことができ、あるいは築く見通しがあるなかで、状況をみながら行き来する人々」と「生活の本拠地を日本とせざるをえない状況下で帰国の契機がつかめずにいる人々」の固定化である。後者については、その実態としては、日本への定住化が進行すると考えることができる。家族帯同デカセギが増え、帯同した子どもの生活や教育が日本を基盤としたものとなり、また、日本で職を継続的に得ることが可能ならば、そうした生活を手放すことは選択されにくいであろう。日本で家庭を築くケースも現れており、日本で生まれる子どもも出てきている。だからこそ、ある留守家族は「1回行ってしまったら、帰ってこなくなるでしょ。行かないのが一番いい」と語り、再デカセギを家族関係に対するリスクと認識する。親世代として特に頼りにする子どもに関しては再デカセギの是非についてとりわけ慎重にならざるをえないのである。

このように、全体として再デカセギに対する積極的な意向はみられないなかで、留守家族あるいは帰国者としての再デカセギの必要性・可能性の判断や、再デカセギへの期待度・受容度の高低は、非常に個別的・選別的であり、現実として家族関係の親疎の再編成を伴うものといえる。

第2項 家族をめぐるジレンマ——デカセギへの助言と老後不安

国を越えた家族関係を経験して、留守家族と帰国者は何を思うのか。彼らは自らの経験から助言すべきものをもっている。そのなかに、デカセギをめぐる家族のありようについての彼らの正直な思いを見出すことができるだろう。

まず、留守家族としてデカセギ希望者の家族に伝えたいこととしては、「留守家族と連絡をとる

こと」「家族を帯同すること」の2点が特に強調されている。この他、デカセギにはさまざまなリスクがあり、帰国後の生活が必ずしも安定・安泰なものとなるとは限らないことも併せて指摘されており、デカセギ希望者およびその家族には、相応の覚悟をもってデカセギ者を送り出すことが求められている。帰国者からデカセギ希望者に対する家族関係への助言においても、留守家族と同様に、「留守家族と連絡をとること」「家族を帯同すること」の2点が多くあげられているが、なかでも「家族帯同」を勧める声は強い。これらの助言は、いずれも、デカセギを肯定し、そのデカセギを成功させるための方策を示すものであるが、デカセギをめぐる家族関係はひとつ大きな問題を抱えている。それは留守家族の中心を占める親世代の老後問題である。

日系社会においては高齢化が進行しており、福博の高齢化率はおよそ20%であり、高齢者を含むあるいは高齢者のみの世帯が半数超を占め、子どもとの同居率は6割を超える（サンパウロ人文科学研究所 2002:61）。この高齢化率は2006年においてもほとんど変わらない（2006年調査）。子どもと同居していない場合でも、7割が比較的近隣に居住し、7割が毎日～週1回顔をあわせている。従って、介護は専ら家族に期待されることとなり、老人ホームに「入居したいと思わない」が6割である（サンパウロ人文科学研究所 2002:81）。このように、高齢者の日常は子ども世代との極めて親密なつながりのなかで営まれている。

従って、福博の留守家族も子どもとの老後生活を想定していると考えられる。それを裏付けるように、将来の居住希望地を問うと、9割弱が福博で老後を過ごすことを選択する。自分の老後を子に託したいと明言する親は少なかったものの、施設入所について否定的なメンタリティが主流であるならば、子ども世代への老後期待は大きいと思われる。ところが、現実においては、デカセギからの帰国時期をはかることは困難である。

家族帯同は、デカセギ者を支える存在が身近にあるという点において、親世代を安心させるであろう。しかしながら、家族帯同というよりよい状態でデカセギ者を送り出すこと/デカセギに行くことは、場合によっては、留守家族である親世代の老後生活への支え手を失うことにもつながる。そこに、デカセギをめぐる家族が抱え込まざるをえないジレンマが存在する。今後、留守家族の高齢化が進行するにしたがって、国を越えた家族関係の内実や、その関係性に関するそれぞれの世代からの評価は変わっていくものと思われる。

第3項 デカセギのメンタリティ——留守家族とデカセギ者の温度差

福博における留守家族とデカセギ者の関係は、冒頭で述べたように、60～70代の親世代と30代前後の子世代から成る世代間関係でもある。留守家族においては、デカセギを経済的手段としてとらえる意識と日本を見聞する機会としてとらえる意識とが並存していた。デカセギは文字通りの「出稼ぎ」であると同時に「社会見学」としてとらえられていた。従って、その場合、日本へ行くことは「一種のブーム」でもあるとされ、ある留守家族によれば、「日本へ行って、見て、ついでに遊んでやろう、自由なうちに行ってみよう、という流れ」にのって若者は日本に向かった。

デカセギがこのように説明されるのは、ひとつには、日本を知らない2世、3世の増加により、日本という国に対する好奇心に発する来日が増えつつあり、実態として上記のような傾向がみられるようになったためである。もうひとつは、先に指摘したように、日本に「稼ぎに行くこと」を喜ばしいこととはとらえない認識が存在するために、日本行きについて「稼ぎに行くこと」以上の付加価値が必要とされるためであろうと思われる。なぜなら、60～70代の留守家族は、ブラジルを自

分の国と呼び、ブラジルで一生を終えるつもりであると述べると同時に、日本に対しては特別の気持ちをもつからである。この日本への思いは、例えば、「言うに言えないものが潜んでいる。これは、何て言ってもいいか知らない、自分でも。潜んでいるわけね、何かがこのなかにね」「血のなかにあるものは争えないということがあるのではないかという気がする」「日本人の魂ってものがある」と表現され、日本を単なる稼ぎ場として位置づけることには強いためらいがみられる。こうした人々にとっては、「先祖の墓があること」が自分を日本へ引き寄せる大きな力となっている。このように、留守家族＝親世代においては、子どもの日本行きは「稼ぐ」という一語で括られることなく、日本の文化にふれる意義、自分のルーツを知る意義、即ち、「社会見学的」な意義をもつ経験でもあると定義される。

これに対して、帰国者は親に比べればリアリストである。観念的な日本イメージや、情緒的な日本への感情にとらわれることが少ないように思われる。稼ぐという現実的な理由や消費文化への憧れから日本に出かけていき、日系人として異国で暮らす経験をした結果、デカセギのプラス面とマイナス面を冷静にとらえている。経済的な必要があれば、再デカセギにも行くであろう。デカセギへの思い入れは留守家族の方が強く、デカセギ観もまた留守家族において硬直的といえるかもしれない。以上みてきたように、留守家族とデカセギ者では、日本へのデカセギに対する思いには温度差が存在する。

第4項 デカセギの今後と検討課題

以上、留守家族と帰国者の眼を通してデカセギあるいはデカセギ者のありようをとらえることによって、デカセギ者がそれぞれに世代間関係や家族生活を営み、そこにおいて日本へのデカセギを選択していること、その選択をめぐっては世代それぞれの立場に付随する多様な事情があることが浮き彫りにされたと考える。しかし、トランスナショナルな視角からの検討を要する課題はまだ多く残されていることはいうまでもない。最後に、今後検討されるべき課題を整理しておきたい。

1点目は経済的な側面からみた問題である。ブラジル経済の状況次第では、今後もデカセギという現象は拡大していくだろう。まず、福博村という地域に視点を定めるならば、若い世代が流出した結果、送り出す側の地域が疲弊するという点においては、この村も例外ではないといえる。中心的産業である農業については、栽培する作物の種類や栽培の方法を変える、あるいは、栽培をやめて卸に転換するなどの工夫や努力がなされているものの、村全体としての成果は大きいとはいえず、農業衰退の勢いをとめることは難しい状況にある。従って、デカセギという選択がより身近な選択肢のひとつとなるなかで、帰国者が福博に帰る＝帰郷することを暗黙の前提とし、彼らに地域社会の活性化を託すという期待あるいは思惑が働かざるをえないことも理解できよう。しかしながら、今のところ、そうした期待が実現されているとはいえない。

とはいえ、デカセギをめぐる状況は刻々と変化しているのであり、デカセギの長期化・常態化という状況のなかで、福博のデカセギ者が地域に対していかなる働きをもたらす存在となっていくのか、という視角は重要である。家族や親族への送金という個人的な援助だけではなく、例えば、地域が発展していくためのプロジェクトを発案・運営するなど、地域のリーダーとしての貢献の可能性あるいはその兆しがあるとすれば、それはどこに認められるのだろうか。つまり、デカセギが、個人的あるいは家族的事情から主体的に決定・選択・実行されつつ、同時に、地域にとってより公的な効果をもたらしている（もたらしていける）とすれば、それはどのようなプロセスを経るもの

なのか。たしかに、本調査の対象者である帰国者においては、転職して起業を目指したいとする者は2割に満たない。しかし、潜在的な起業志望者はそれよりは多いと推測されることから、そうした下からの動きがどのように成長するのか・しないのか、そして、どのような力を発揮することになるのか・ならないのか、注目されるべき点であろうと思われる。

2点目は社会・文化的な側面に関わる問題である。ここには、アイデンティティや文化的摩擦、世代間の意識の違いなどに関わる問題が含まれる。はじめに、アイデンティティについてみると、本調査をみる限り、デカセギについては、消極的な賛成をも含めれば、7割超が賛成していた。少なくとも、1世あるいは1世から日本の話を聞いて育った2世を親にもつ世代にとっては、「日本文化経験ツアー」としての意味づけは消えないであろう。しかしながら、既に日本語を十分に理解することのできない若い世代がデカセギ者の主流になりつつある。言葉の問題だけではなく、アイデンティティにおいても、祖父母や親とはまったく異なる意識をもつ世代が現れているということである。稼ぎ場としての日本へのルートは今後も「活用」されるにしても、デカセギのメンタリティはさらに大きく転換していくものと思われる。彼らにとって、日本が意味するものは変わらざるをえないだろう。福博を含め日系社会における日本へのデカセギの意味の変遷を追究することが、今後さらに重要な課題となってくるとと思われる。

次いで、世代間の問題としては、高齢化の問題があげられる。過疎化とともに進行する留守家族の高齢化に関しては、増加する日系高齢留守家族の生活実態をとらえるとともに、そこにみられる世代間の意図や情緒関係のありようをとらえること、デカセギの経験がどのようなストーリーとして自らの中で再構成され、あるいは、若い世代に語られていくのか、といったことにも関心が寄せられることになろう。

注

- 1) 福博村を対象としたデカセギ現象に関する調査研究として喜多川・藤木・嶋（1992）、喜多川（1993, 1996）とサンパウロ人文科学研究所（2002）がある。
- 2) スザノ市と福博村について詳しくは、小内・小野寺（2007）の第1章を参照。
- 3) 現地での聞き取りによる。
- 4) <http://www.100nen.com.br/ja/fukuhaku/>、2009.3.7、参照。
- 5) 「明日のスザノ福博村は①」『サンパウロ新聞』1999年6月も参照。
- 6) 「変貌する生産地図（29）」『パウリスタ新聞』1980年4月3日、参照。
- 7) 同上、参照。
- 8) 『福博村村会議事録』1988年版より。
- 9) 福博村会から入手した資料、参照。なお、「デカセギ経験者」とは、資料で使われている表現であり、その年のデカセギ者ではない。
- 10) <http://www.ibge.gov.br/home/estatistica/populacao/>、2009.3.7、参照。
- 11) 福博村の治安の悪化について詳しくは、小内・小野寺（2007）の第1章第5節および補節を参照のこと。
- 12) 「明日のスザノ福博村は④」『サンパウロ新聞』1999年、6月、参照。
- 13) フェーラとは屋台式の青空市場をいう。生鮮食料品や総菜をはじめ日用雑貨なども扱う。

- 14) 1993年の福博村調査の報告（喜多川 1993）をみると、当時の調査においても、留守家族のほとんどが世帯主やその妻であり、デカセギ者の続柄は、世帯主の子が中心であった。また、デカセギ者については、「日系人の最上層と最下層はいかない。中間・中堅層が出かけている」「デカセギ者の総合イメージは、三世を中心とした、若年層の、次世代を担う、独身男女で高学歴者」との記述がみえる。それから15年後の2006年においてもこれらの点に変わりはないといえよう。
- 15) 2002年「報告書」によれば、家庭における使用言語は、ポルトガル語3割、日本語3割、日本とポルトガル語の併用4割となっている。2006年調査では、ポルトガル語4割、日本語3.5割、日本語とポルトガル語の併用2.5割であり、日本語とポルトガル語の併用が減少している点が注目される。
- 16) たとえば、梶田（1998）および喜多川（1993）を参照。
- 17) デカセギ者と日本との関係をとらえる視角としては、リピーター、長期化、定住化などさまざまな枠組がある。本分析でとりあげたのは留守家族と帰国者であるため、ブラジルからみて「帰国するか、しないか」という視点から検討するにとどめた。従って、帰国していない者のライフスタイルを、リピーターと呼ぶのか、あるいは、定住化としてとらえるのか、その定義は何か、といった問題には踏み込まなかった。いずれにしても、滞日の長期化が強まる傾向にあることは否定できないと思われる。

参考文献

- 浅野卓夫, 2003, 「アリアンサ移住地・スザノ入植地について」工藤真由美・津田葵編『言語の接触と混交——日系ブラジル人の言語の諸相』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」, 20-2.
- 梶田孝道, 1998, 「出稼ぎ10年後の日系ブラジル人—1998年の日系労働者アンケート調査に基づく再検証」『国際関係学研究』25, 1-22.
- 喜多川豊宇, 1993, 「日系コロニアにおける出稼ぎの影響と展望—サンパウロ近郊村の実態調査—」『東洋大学社会学研究所報』25, 1-38.
- , 1996, 「浜松市における日系ブラジル人の生活構造と意識——日伯両国調査を踏まえて—」『東洋大学社会学部紀要』34-1, 113-97.
- 喜多川豊宇・藤木三千人・嶋澄, 1992, 「日系ブラジル人労働者の実態調査 群馬県大泉町とサンパウロ市郊外スザノ市日系人集団地福博村の調査を通して「永住型」「分居型」「出稼ぎ型」の基本3類型」『東洋大学社会学部紀要』29-2, 96-132.
- コガ・エウニセ・アケミ・イシカワ, 1997, 「国際労働力移動における家族関係の役割及び変容—来日日系ブラジル人の場合—」『Sociology today』8, 1-17.
- 野入直美, 2004, 「沖縄における日系人・定住外国人の国境を越える移動とエスニック・ネットワーク（上）—アメリカ人、台湾人、日系ペルー人、日系ブラジル人の意識調査から—」『琉球大学法文学部紀要 人間科学』14, 271-189.
- 小内透編著, 2006, 『調査と社会理論・研究報告書21 日系ブラジル人のトランスナショナルな生活世界』北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室.
- 小内透・小野寺理佳, 2007, 「大都市近郊農村から見たデカセギの意味——サンパウロ州スザノ市福

- 博村を事例として——」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書24 日系ブラジル人のトランスナショナルな生活世界の諸相』北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室, 15-77.
- 大野盛雄・宮崎信江, 1957, 「大都市周辺農家の成立」泉靖一編『移民——ブラジル移民の実態調査』古今書院.
- 佐野哲, 1998, 「日系人労働者の帰国後と出稼ぎ意識の変化—在ブラジル日系人を対象とした2回のアンケート調査から」『国際人流』11(12), 17-21.
- サンパウロ人文科学研究所, 2002, 『日系社会実態調査報告書』サンパウロ人文科学研究所.
- 篠塚英子, 1992, 「日系ブラジル付添婦たちの現状と問題」『女性労働』17, 40-51.
- 玉川淳, 2002, 「ブラジルの高齢者—日系ブラジル高齢者の暮らしを中心に—」『生きがい研究』（長寿社会開発センター）7, 104-16.
- 山中啓子, 1999, 「日系ブラジル人女性の日本逆流出稼ぎ現象：世帯ストラテジーと「故国」追求」『日米女性ジャーナル』25, 63-88.
- 渡辺雅子, 2002, 「日系ブラジル人のデカセギ」『アジア遊学』39, 126-36.

（第1・2節：小内透、第3～6節：小野寺理佳）